

若年女性の低用量避妊薬および緊急避妊薬の活用に関わる
影響要因の検討

東京医療保健大学東が丘・立川看護学部

きぬがわ さえこ
衣川 さえ子

若年女性の低用量避妊薬および緊急避妊薬の活用に関わる 影響要因の検討

東京医療保健大学東が丘・立川看護学部

衣川 さえ子

黒澤 範子

吉田 亜希子

(〒190 - 8590 東京都立川市緑町 3256 TEL 042-521-7202)

要旨

【目的】低用量避妊薬 (oral contraceptives :OC) ・緊急避妊薬 (emergency contraceptive pills :ECP) の活用を促す方法を検討する基礎資料に資するために、若年女性を対象に活用に関わる影響要因を明らかにした。

【方法】全国の15～34歳女性3,000名にwebによる質問紙調査を行った。内容は属性、OC・ECP服用経験、避妊法の知識、資源、性的リスク対処意識、平等主義的性役割態度、自尊感情から構成した。OC・ECP活用の意思を目的変数とし影響を判別分析した。

【結果】1)属性 平均年齢:24.9歳(SD=5.12)、既婚:969名32.3%。就業:正社員・職員783名26.1%、派遣・請負507名16.9%、学生984名32.8%。2)OC・ECPの活用状況:セックス経験者2117名中妊娠経験916名30.5%。OC服用中151名8.8%、過去のOC服用383名22.2%、ECP服用経験261名15.2%。3)OC・ECP活用の影響因:OC活用の意思は使いたい1,411名47.0%、使いたくない1,589名53.0%であり、影響因を判別分析の結果 $p<.001$ で、自尊感情、避妊法の知識、資源に正の関連(判別係数.59～.33)、平等主義的性役割態度に負の関連(判別係数-.49)を認めた。年齢階層別にみて判別係数が高い影響因は15～19歳代で資源と避妊法の知識、20～24歳代で自尊感情と資源、25～29歳代で避妊法の知識と自尊感情、30～34歳代で自尊感情であった。既婚では資源、未婚では避妊法の知識等、妊娠経験では自尊感情、未経験では資源と避妊法の知識が関連を示した。ECP活用の意思ではOCと概ね同様な関連の傾向を示したが、20～24歳代で平等主義的性役割態度が正の関連、自尊感情が負の関連を示した。

【結論】若年女性のOC服用は9%であり、OC・ECP活用の意思を判別分析した結果、自尊感情、避妊法の知識、資源、平等主義的性役割態度で高い判別係数値を得たことから、活用に4要因が影響を及ぼす可能性が示唆された。

1. 調査研究目的

わが国の平成 28 年度の人工妊娠中絶総数は 168,015 件であり、前年度に比べて 4.7% 減少している。内訳を見ると、「20 歳未満」14,666 件、「20～24 歳」38,561 件、「25～29 歳」33,050 件、「30～34 歳」34,256 件である。「20 歳未満」の人工妊娠中絶の実施率（女子人口千対）は 5.0 となっていることから、減少に向けた取り組みが一層求められる。緊急避妊薬 (Emergency Contraceptive Pills :ECP) が平成 23 年 5 月 26 日からノルレボとして日本で発売された。若年女性の望まない妊娠や人工妊娠中絶の背後に、緊急避妊薬 (ECP) や低用量避妊薬 (Oral Contraceptives :OC) に対する理解不足と副作用への不安感がある。

そこで、本研究では OC・ECP の活用を促す方法を検討する基礎資料に資するために活用に関わる影響要因を明らかにすることを目的とした。若年女性の OC・ECP の活用実態と関連要因を把握し、活用の推進策を講じれば人工妊娠中絶の減少に繋がる。

2. 調査研究方法

研究デザインは量的横断的記述研究、関係探索型で、Web による質問紙調査を行った。

2-1 調査対象

全国 47 都道府県に在住する 15～34 歳女性 3,000 名。2018 年 8 月 1 日現在の 5 歳階級男女別人口における 15～34 歳代女性の人口比率を算出しそれに応じて、15～19 歳代 699 人、20～24 歳代 747 人、25～29 歳代 732 人、30～34 歳代 822 人を抽出した。

2-2 調査時期

調査は、平成 31 年 2 月から 3 月に実施した。

2-3 調査内容

1) 属性

[年齢][未婚既婚の別][同居の家族][就業状況][一ヶ月の小遣い額]とした。

2) 主調査内容

調査内容の枠組は、性行動を [OC・ECP の服用を含む避妊行動][妊娠経験の有無][性知識の情報源]で捉え、行動選択の影響因として [避妊法の知識][避妊に関する資源]を、関係性に関わる影響因として [性的リスク対処意識][平等主義的性役割態度][自尊感情]を設定し、[OC・ECP 活用の意思]を目的変数とし関連を分析することとした(図1)。

先行研究を参考に、[OC・ECP 服用を含む避妊行動](以下避妊行動)7項目、[性知識の情報源]16項目、[避妊法の知識](以下知識)15項目、[避妊に関する資源](以下資源)6項目

の質問項目を自作し、調査票を作成した。[OC・ECP 活用の意思]は利点を説明後に、使用したいか否かとその理由を問うた。[性的リスク対処意識]は草野により、性的関係におけるリスクを避けるための適切な行動がとれる自己管理能力の認知と相手と親密な関係を形成しコミュニケーションをとることのできる性的対人関係能力に関する自信と定義され、開発された尺度 1) である。性パートナーと関係調整に反映すると考え、開発者の許可を得て測定用具とした。[平等主義的性役割態度]は性役割において男女の平等を信じる傾向性で、女性としての性行動に反映する可能性がある。平等主義的性役割態度スケール短縮版 2) 15 項目(鈴木,1994 以下性役割態度)は、20 歳以上の男女が対象に想定されていることから測定用具に選択した。高得点ほど平等主義的である。[自尊感情]は自己の能力や価値についての評価で、評価の高低が性行動に反映する可能性がある。使用頻度の高い自尊感情尺度(ローゼンバーグ,1965)邦訳版(山本ら,1982) 3) (以下自尊感情)を用いて測定した。

回答は、[性知識の情報源]は第一位～第三位を順位法で、「OC・ECP の使用理由」は複数回答法で求め、それ以外の質問項目は単一回答法とした。

2-4 調査方法

Web 調査は業者にデータ収集を委託し、実施した。調査会社のモニターパネル(調査協力を前提に事前に登録された調査モニター集団)の中から調査対象層の 15～34 歳女性に絞り込み、調査協力を依頼した。サンプリングは無作為に行い、研究者が個別の属性データを知ることがない方法で実施した。調査会社の Web 上にアンケート専用サイトを設け、調査協力者が回答肢にチェックを入れ回答できるように調査票を作成した。

2-5 分析方法

知識 15 項目は正答に 1 点を配し、15 点満点で算出した。資源に関する 6 項目は「はい」に 1 点を配し、合計得点を 6 点満点で算出した。性的リスク対処尺度 18 項目は、「とてもそう思う」～「ぜんぜんそう思わない」に 5～1 点を配し、合計得点を 90～18 点で算出した。性役割態度尺度 15 項目は、「まったくそのとおりだと思う」～「ぜんぜんそう思わない」に 5～1 点を配し、合計得点を 75～15 点で算出した。自尊感情尺度 10 項目は、「あてはまる」～「あてはまらない」に 5～1 点を配し、合計得点を 50～10 点で算出した。記述統計を算出し、各尺度の Cronbach's α を算出した。Kolmogorov-Smirnov 検定で正規性を確認後、ノンパラメトリック検定を行った。影響因の影響の程度をみるため、OC・ECP の活用の意思「使いたい」「使いたくない」を目的変数とし、性的リスク対処意識、性役割態度、自尊感情、知識、資源を説明変数として、Wilks の λ を用いたステップワイズ変数選択法で判別分析を行った。標準化された正準判別関数係数(以下、判別係数)は、重回帰分析の標準化係数と同様に、各説明変数の目的変数に対する相対的な影響力の大きさを表しているため、相関係数と同様に影響の程度を解釈した。

統計解析ソフトは、SPSS (25.0J) を使用し、有意水準は、.05 とした。

2-6 研究等における倫理的配慮

調査対象者に対し、本研究の目的、方法、倫理的配慮について Web 上にて文書で説明した。対象者の性行動と OC・ECP の活用に関する調査である旨を説明し同意するにチェック後回答してもらう方法で、同意を得た。個人情報、臨床研究に関する倫理指針、看護研究の倫理指針を遵守し保護に努め、依頼業者と秘密保持義務、個人情報保護、損害賠償責任、契約期間、不正な利益供与等の禁止、終了後の取扱い等を記載した守秘契約書を交わした。なお、所属大学研究倫理審査委員会の承認を受け、実施した。

3. 調査研究成果

回答 3,000 件を分析した結果は、以下のとおりである。

3-1 対象者の属性

1) 年齢・未既婚の別

年代階層別の回答者数は 15～19 歳代 699 名 (23.3%)、20～24 歳代 747 名 (24.9%)、25～29 歳代 732 名 (24.4%)、30～34 歳代 822 名 (27.4%) で、年齢は平均値 24.9 歳 (SD=5.12)、既婚は 969 名で 32.3%を占めた (表 1)。

2) 同居家族

同居家族は、夫・パートナー 1,093 名 (36.4%)、子ども 631 名 (21.0%)、父母 1437 名 (47.9%)、兄弟姉妹 937 名 (31.2%) で、一人暮らしは 432 名 (14.4%) であった。

3) 就業状況

就業人数割合の多い順にみると、学生 984 名 (32.8%)、正規の社員・職員 783 名 (26.1%)、パート・アルバイト 507 名 (16.9%)、専業主婦 491 名 (16.4%) であった。

4) 一ヶ月の小遣い額

小遣いなし 551 名 (18.4%)、5 千円未満 374 名 (12.5%)、5 千円～1 万円未満 534 名 (17.8%)、1 万円～2 万円未満 464 名 (15.5%)、2 万円～3 万円未満 419 名 (14.0%) であった。

3-2 避妊行動および OC・ECP の活用状況

現在セックス相手がいる 1,722 名 (57.4%)、過去のセックス経験 395 名 (13.2%)、未経験 883 名 (29.4%) で、セックス経験者 2,117 名の内、妊娠経験は 916 名 (30.5%) であった。未婚者 2,031 名に占める妊娠経験者は 145 名 (7.1%) であった。

現在セックス相手がいる者の避妊方法はコンドーム 1,159 名 (67.3%)、膣外射精 898 名 (52.2%) であった。OC 服用 151 名 (8.8%)、過去の OC 服用 383 名 (22.2%)、アフターピル服用経験 261 名 (15.2%) であった。相手との関係では避妊してほしいと告げる 1,143 名 (66.4%)、断っても無理やりキスや身体を触られた 332 名 (19.3%) であった。

3-3 避妊法の知識および OC・ECP の活用に対する意思

1) 性知識の情報源

性知識の情報源で利用頻度の多い順の第1位では Web サイト 1,135 名 (37.8%)、SNS 506 名 (16.9%)、マンガ・コミック 250 名 (8.3%)、付き合っている人 248 名 (8.3%)、友人 228 名 (7.6%) の順に多かった。第2位では Web サイト 431 名 (37.8%)、SNS 545 名 (18.2%)、友人 379 名 (12.6%)、マンガ・コミック 344 名 (11.5%)、付き合っている人 248 名 (9.9%) の順であり、第3位も同様の回答傾向であった。学校の性教育は第1位 153 名 (5.1%)、第2位 148 名 (4.9%)、第3位 215 名 (7.2%) であった。

2) 避妊法の知識

15 問中の正答数は最低 4 問、最高 15 問で、平均値は 10.71 (SD=1.74) であった。正答率の高い項目は「月経不順ならめったに排卵がないから避妊の必要がない」98.4%、「女性が上位なら精液が流れ出るので妊娠しない」97.6%であった。低い項目は「ゼリー付きコンドームのゼリーには、殺精子剤が配合されている」19.1%であり、「子宮体がんは OC 使用により発症リスクが半分になる」23.3%、「OC には卵胞ホルモンと黄体ホルモンが含まれる」45.3%であった。

3) 避妊に関する資源

資源 6 項目の合計得点は平均 2.84 (SD=1.71) 点であり、OC を用いる必要なお金がある 646 名 (54.9%)、診察を受ける時間が取れる 2,083 名 (69.4%)、婦人科クリニックが自宅近くにある 369 名 (45.6%)、妊娠や避妊について相談できる人がいる 1,798 名 (59.9%)、避妊法の最新情報や知識を手にする機会がある 1,442 名 (48.1%)、母親の OC 服用を聞いた経験がある 182 名 (6.1%) であった。

4) OC・ECP の活用に対する意思

利点の説明後に OC の活用の意思を問うと、使いたい 1,411 名 (47.0%)、使いたくない 1,589 名 (53.0%) であった。使いたい理由を回答数の多い順にみると、避妊効果が高い 972 名 (32.4%)、自分で決められる 739 名 (24.6%)、避妊以外の効用 588 名 (19.6%)、既に使っている 180 名 (6.0%) であった。他方、使いたくない理由は、副作用が心配 1,058 名 (35.3%)、婦人科クリニックに行くのが面倒 416 名 (13.9%)、他の避妊法よりもお金がかかる 385 名 (12.8%)、既にあるコンドーム等の避妊方法で充分 356 名 (11.9%)、毎日続けて服用するのが面倒 345 名 (11.5%)、妊娠したい 266 名 (8.9%)、妊娠したら産んでもよい 236 名 (7.9%)、婦人科で診察を受けることが恥ずかしい 182 名 (6.1%) であった。

また、ECP の利点説明後の活用意思では、使いたい 1,697 名 (56.6%)、使いたくない 1,303 名 (43.4%) であった。

3-4 OC・ECP の活用に影響する要因

1) 各尺度におけるデータの信頼性と関連性

各尺度は性的リスク対処意識 Cronbach's $\alpha = .87$ 、尺度得点の平均値 60.78 点 (SD=6.83)、性役割態度 Cronbach's $\alpha = .85$ 、尺度得点の平均値 41.69 点 (SD=6.81)、自尊感情 Cronbach's

$\alpha = .88$ 、尺度得点の平均値 33.01 点 (SD=3.63) であった。さらに、知識、性的リスク対処意識、性役割態度、自尊感情、資源の得点の相関を Spearman の順位相関係数で検定した結果、性的リスク対処意識と性役割態度、自尊感情、資源との相関係数はそれぞれ、 $r_s = .08$ ($p < .01$)、 $r_s = .20$ ($p < .01$)、 $r_s = .07$ ($p < .01$) であった。性役割態度と自尊感情の得点の相関係数は $r_s = .07$ ($p < .01$)、知識と資源の得点の相関係数は $r_s = .1$ ($p < .01$) であった。尺度間の相関は僅かなため、各要因を独立変数として扱えるものとして分析した。

2) OC の活用に影響を及ぼす要因

OC 活用の意思「使いたい・使いたくない」で、各尺度得点に差があるかをみるため、Mann-Whitney の検定を行った結果、性リスク対処、知識、および資源 ($P < .001$)、性役割態度 ($P < .01$) で、「使いたい」群がいずれも得点が高いという有意な差が認められた。OC を使いたいかなの意思を目的変数として判別分析した結果、判別係数は自尊感情 .59、資源 .51、知識 .33、性役割態度 -.49 であった ($P < .001$ 、以下全結果で有意確率 $P < .001$ のため記載を省く)。すなわち、自尊感情と資源がかなり関連しており、性役割態度では負の関連を示した (表 2)。

次に、年齢階層別にみると判別係数は 15 ~ 19 歳代では資源 .57、知識 .55、自尊感情 .34、性役割態度 -.40 であり、20 ~ 24 歳代では自尊感情 .65、資源 .55、性役割態度 -.52 であった。25 ~ 29 歳代では知識 .65、自尊感情 .58、性役割態度 -.49 であり、30 ~ 34 歳代では自尊感情 .56、知識 .37、資源 .33、性役割態度 -.66 であった。既婚・未婚別にみると、既婚では自尊感情 .63、知識 .57、資源 .52 であり、未婚では資源 .70、知識 .35、自尊感情 .33、性役割態度 -.43 であった。すなわち、既婚では自尊感情、資源、知識が同程度の関連を示し、未婚では資源が強い関連を示した。

妊娠経験の有無別にみると、ありでは自尊感情 .63、資源 .58、知識 .50 であり、なしでは自尊感情 .52、資源 .47、知識 .42、性役割態度 -.49 であった。すなわち、妊娠経験ありでは自尊感情や資源、知識が関連し、なしでは加えて性役割態度が負の関連を示した。

現在のセックス相手の有無別にみると、ありでは自尊感情 .73、知識 .39、資源 .35、性役割態度 -.45 であり、なしでは資源 .75、知識 .36、自尊感情 .32、性役割態度 -.34 であった。すなわち、ありでは自尊感情、なしでは資源との強い関連を認めた。

3) ECP の活用に影響を及ぼす要因

同様に、ECP を使いたいかなの意思を目的変数に影響を及ぼす要因を判別分析した結果、判別係数は自尊感情 .56、知識 .37、資源 .33、性役割態度 -.66 であった。年齢階層別にみると、15 ~ 19 歳代では知識 .79、資源 .68 で、20 ~ 24 歳代では性役割態度 .86、自尊感情 -.61 で、25 ~ 29 歳代では自尊感情 .62、性役割態度 -.67、知識 .39 で、30 ~ 34 歳代では知識 .50、資源 .49、自尊感情 .34、性役割態度 -.50 であった。既婚・未婚別にみると、既婚では資源 .69、自尊感情 .62、性役割態度 -.42 であり、未婚では知識 .51、資源 .48、自尊感情 .31、性役割態度 -.55 であった。妊娠経験の有無でみると、ありでは自尊感情 .66、資源 .60、知識 .44 であり、なしでは自尊感情 .45、知識 .44、資源 .35、性役割態度 -.62 であった。すなわち、OC と同様な関連の傾向性を示したが、20 ~ 24 歳代では性役割態度が正の関連、自尊感情が負の関連を示した。

4. 考察

4-1 データの信頼性と適切性

対象とした若年女性は、2018年の15～34歳人口比率を反映し全国47都道府県から3,000名を抽出した。本調査での30～34歳女性の既婚率は62.4%であり、2015年国勢調査による同年齢層の未婚率34.6%から導かれる既婚率65.4%とは同程度である。また、2015年女性労働力率は、20～24歳代69.5%、25～29歳代81.4%、30～34歳代73.5%で、本調査での労働力率20～24歳代42.3%、25～29歳代74.9%、30～34歳代63.3%と比べ、20～24歳代以外は大差ない。20～24歳代における差は、女子の大学進学率の全国平均の2015年47.4%から2017年57.3%への上昇が一因と推察される。

以上から得られたデータは、わが国の若年女性の母集団を概ね反映するものと考えられる。また、影響因とした、性的リスク対処意識、性役割態度、自尊感情の3尺度の信頼性係数は十分な値で、自作の知識と資源も判別分析で関連を示す十分な値であったことから、概ね適切な内容項目で構成されたものと考えられる。

4-2 OC・ECPの活用に影響を及ぼす要因とその示唆

調査の結果、若年女性のOC服用率は約9%で、特定のセックス相手がいる場合に使いたい意思を47.0%の者が示したことから、OC活用の潜在的なニーズがあるといえる。活用の意思を目的変数とする判別分析を行った結果、知識、資源、自尊感情で正の関連を示した。これは知識や資源を持ち、自己の能力や価値の評価である自尊感情が高い者✓ほど、OCの活用を志向していることを意味する。しかし、逆相関を示した性役割態度をみると、自尊感情とわずかな相関が確認できたが、平等主義的な者ほどOCの活用を志向していない。

また、年齢階級別にみると、15～19歳代では資源や知識、20～24歳代では自尊感情や資源、25～29歳代では知識や自尊感情、30～34歳代では自尊感情が関連を示した。加えて、未婚とセックス経験なしでは資源との強い関連を示した。概括すると、15～24歳代では資源や知識が、25～34歳代では自尊感情がより影響している。この傾向性と性知識の情報源としてWebサイトやSNSを利用し、OC成分や効用に関する知識の正答率が低く、半数以上が最新の避妊法の知識を得る機会がないことを重ねて解釈すると、正確な避妊法の知識や情報が得られていないといえる。そのため、とりわけ、15～24歳代の女性にOC・ECPを含む最新の避妊法の知識を提供することが何よりも優先すべき活用の推進策といえる。さらに、避妊に関する資源、中でも費用で判別係数が.72と高い相関を認めたことから、活用に必要なコスト自体が大きな影響因である。世界147ヶ国中約70%の国では、処方箋が不要でドラッグストア等で購入できる⁴⁾ことから、わが国でのOC・ECP活用システムの検討が求められる。本調査では、影響因とした性的リスク対処意識はほとんど無関係であった。北原による看護学生の性的リスク対処意識と妊孕性に関する知識調査⁵⁾では、性的リスク対処意識には性交経験ありで正の影響、妊娠の悩みありで負の影響が認められている。当該調査の性的リスク対処意識の平均値は3.4であり、本調査の3.38と

差はないものの、年齢層や対象特性が異なり単純に比較し難いため、さらなる検討を要する。

4-3 本研究の限界と課題

本調査により、若年女性におけるOC服用者は約9%で、過去のOC服用は22%という活用の実態が把握できた。OC・ECPを使用したいか否かの意思を影響因との関連で分析した結果、4つの影響因が見出された。しかし、活用におけるOC服用中止等の現実的な問題は把握できていない。今後、OC服用者を対象とし、現実的な行動面での影響因を網羅的に検討することが課題である。

5. まとめ

OC・ECP活用の意思に関する影響因を全国の若年女性3,000名に質問紙調査し、以下の結果を得た。

- 1) OC・ECPの活用状況は、OC服用中151名(8.8%)、過去のOC服用383名(22.2%)、ECP服用経験261名(15.2%)であった。
- 2) OC活用の意思は、使いたい1,411名(47.0%)、使いたくない1,589名(53.0%)であり、影響因を判別分析の結果 $p<.001$ で自尊心、避妊法の知識、資源が正の関連を、平等主義的性役割態度が負の関連を示した。
- 3) ECP活用の意思は、使いたい1,697名(56.6%)、使いたくない1,303名(43.4%)であり、影響因を判別分析した結果、ECP活用の意思ではOCと概ね同様な関連の傾向を示したが、20～24歳代で平等主義的性役割態度が正の関連、自尊心が負の関連を示した。
- 4) OC・ECP活用の意思の影響因を年齢階層、未既婚の別、妊娠経験の有無、現在のセックス相手の有無で判別分析した結果、影響因はそれぞれ異なっていた。
- 5) OC・ECPの活用を促すために、15～24歳代女性を対象に最新の避妊法の知識を提供する必要性が示唆された。

6. 調査研究発表(口頭又は誌上発表)

- 1) 第60回日本母性衛生学会総会学術集会 2019年10月11日・12日浦安市
口頭予定「若年女性の低用量避妊薬・緊急避妊薬の活用に関する横断調査」
衣川さえ子, 黒澤範子, 吉田亜希子 東京医療保健大学東が丘・立川看護学部
- 2) 第20回ICMトリエンナーレ会議 2020年6月21日-25日 インドネシアバリ島
ポスター予定「日本の若年女性の低用量避妊薬・緊急避妊薬の活用についての認識」
衣川さえ子, 黒澤範子, 吉田亜希子 東京医療保健大学東が丘・立川看護学部
- 3) 日本母性衛生学会論文投稿 予定 2019年11月

7. 引用文献

- 1) 草野いづみ：大学生の性的自己意識，性的リスク対処意識と性交経験との関係，青年心理学研究 2006,18,41 - 50.
- 2) 鈴木淳子：平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成，The Japanese Journal of Psychology,1994, 65(1), 34-41.
- 3) 山本真理子，松井豊，山城由紀子：自尊感情尺度（ローゼンバーグ 1965）邦訳版，心理測定尺度集Iサイエンス社，2001, 29-31.
- 4) Grindlay, K., Burns, B. & Grossman, D. Prescription requirements and over-the-counter access to oral contraceptives: a global review. Contraception 88, 91-96 (2013).
- 5) 北村亜希子：看護学生の性的リスク対処意識と妊孕性に関する知識調査，母性衛生，57(4), 598 -606.

表 1. 対象者の属性 (N=3000)

項目		n	%
年齢	平均値 24.9 (SD=5.12)		
	15～19 歳代	699	23.3
	20～24 歳代	747	24.9
	25～29 歳代	732	24.4
	30～34 歳代	822	27.4
結婚	既婚	969	32.3
	15～19 歳代	8	0.3
	20～24 歳代	123	4.1
	25～29 歳代	325	10.8
	30～34 歳代	514	17.1
同居家族	父母	1437	47.9
	兄弟姉妹	937	31.2
	夫・パートナー	1094	36.5
	子ども	631	21.0
	一人暮らし	432	14.4
就業	学生	984	32.8
	正規社員・職員	783	26.1
	パート・アルバイト	507	16.9
	専業主婦	491	16.4
	無職	119	4.1
一ヶ月の小遣い	小遣いなし	551	18.4
	5 千円未満	374	12.5
	5 千円～1 万円未満	534	17.8
	1 万円～2 万円未満	464	15.5
	2 万円～3 万円未満	419	14.0

3万円～5万円未満	343	11.4
5万円以上	315	10.5

表2. OC・ECP活用意思の影響因と標準化された正準判別関数係数 (N=3000)

OC		ECP	
変数	係数	変数	係数
自尊感情	.593	自尊感情	.559
資源	.511	避妊法の知識	.365
避妊法の知識	.332	資源	.33
平等主義的性役割態度	-.493	平等主義的性役割態度	-.658

($p < .001$)

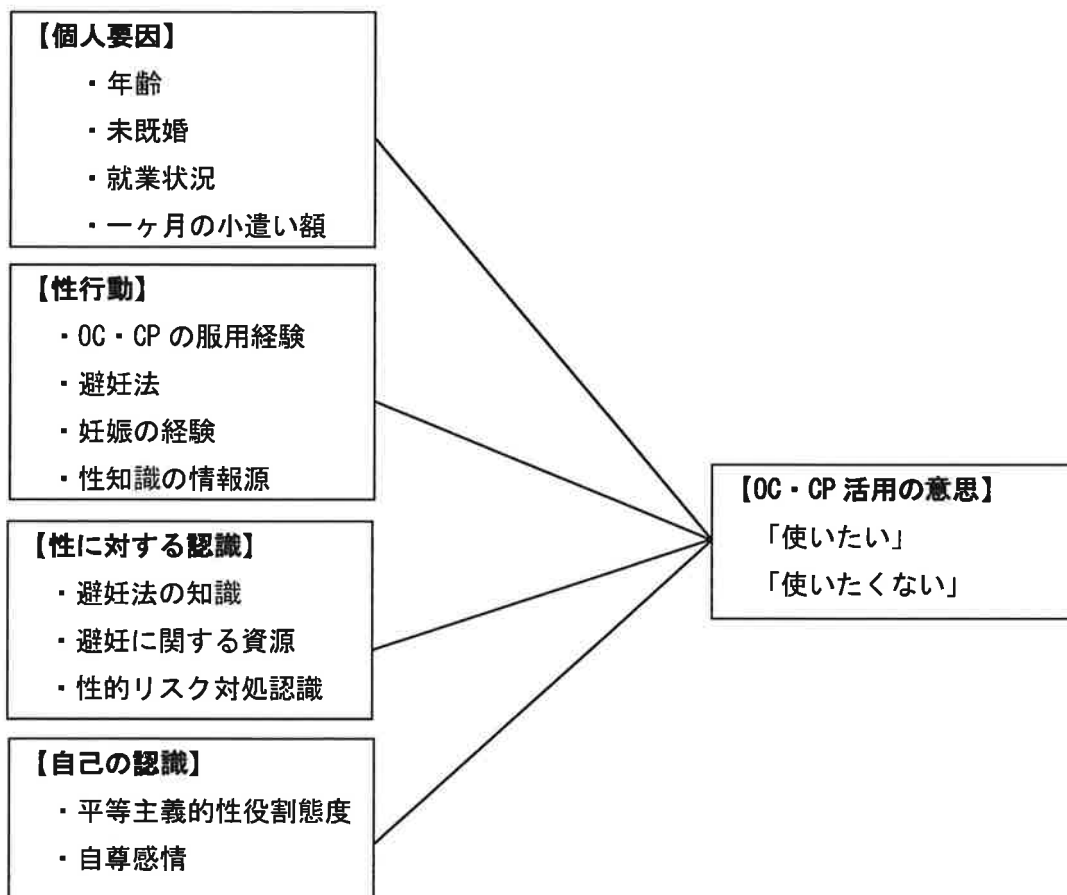


図1. 調査内容の枠組